

北原白秋研究

西山 春文

A Study of Hakushu Kitahara

Harufumi NISHIYAMA

1993～1994年度に個人研究の機会を頂き、大正期の北原白秋の表現上の特質の一端を明らかにした。そこでは、主に、色彩表現に注目し、当時の白秋の短歌の特質を探った。本研究は、前回積み残した課題のいくつかを継続し、考察していこうとするものである。中でも、第二歌集『雲母集』における、色彩以外の表現上の特質を明らかにすることから出発し、その成果を『明治大学教養論集通巻280号』（1995年9月刊）に発表した。以下、その梗概を中心に論じていきたい。

『雲母集』は、第一歌集『桐の花』の「哀傷篇」に示された傷心を引きずっており、当時の白秋の置かれていた特殊状況を見捨てて読むわけにはいかない。だが、ここで重要なことは、その状況と表現との関わりではなく、そういった状況下で、後年の歌風へたどり着く要素がいかに関与形成されていったか、である。そのためにまず、菅野昭正氏の「《観る視線》の詩学」という捉え方を援用しつつ、当時の白秋の視覚表現について考察した。大正二年の作品は、旺盛な創作意欲が先行し過ぎ、未だ、ものを凝視するまでには至っていない。大正三年、四年と時間が経過するにつれて、白秋本来の《観る視線》が表れる

ようになるのである。また、《観る視線》から一步遅れながらも聴覚も回復し始めている。

だが、『雲母集』の表現は『桐の花』のそれとは根本的に異なっている。第一に、文語調を基調としながらも、口語体・会話体を用いている点である。俗謡調の調べに依拠して成立している歌は、後に民謡詩人として白秋を立たしむることになる。第二に、『万葉集』の「真の生活の声」を理想と仰ぎながらも、詩人として「新生」を期す状況がそれを許さなかったために、一首の中に表現上の断絶や渋滞が多く発生しているという点が指摘される。その結果、万葉調に憧憬しつつも、むしろ、新古今調の作品を生み出してしまうという矛盾が生じているのである。しかしながら、最も新しい作品の中には、「天の河棕櫚と棕櫚との間より幽かに白し聞けにけらしも」の一首に代表されるような、既に以後の白秋の歌風を思わせる作品も存在しており、ここに至って明らかに、《観る視線》を獲得した歌人白秋の復活を認めることができるのである。

1996年度は、その後の白秋の表現をめぐって再検討していく予定である。